

しました。

(第2の場面)

この場面で松井さんが、「車道に近い道端に落ちている帽子をひろいあげ、その中のちょうを逃してしまう」のは、「おや、車道のあんなそばに、小さなぼうしが落ちているぞ。風がもうひとつふきすれば、車がひいてしまうわい。」という心理がはたらいたためであり、そのような心理を生じたのは、松井さんのやさしい善意に満ちた性格によるものであろう。しかし、松井さんが、いかに善意のある人であっても、路上にその白い帽子を見かけなければ、このような行為はしなかったのであり、人物の心理は、このようにその人物の置かれている状況に左右される。したがって、よく教室で行われる「その人物の身になって、その人物の気持を考えてみましょう。」という発問は、非常に大切な発問だといえよう。

また、人物の心理は、地の文や会話文からもとらえることができる。

松井さんは、その夏みかんに白いぼうしをかぶせると、飛ばないように、石でつばをおさえました。

(第2の場面)

この時の松井さんの行動を逆に追ってゆくと、

○ 「～松井さんは、その夏みかんに白いぼうしをかぶせると、飛ばないように、石でつばをおさえました。」

↑

○ 「何を思いついたのか、急いで車にもどりました。運転席から取り出したのは、あの夏みかんです。」

↑

○ 「『せっかくのえものがいなくなっていたら、この子は、どんなにかがっかりするだろう。』」

ようになる。「松井さんが白いぼうしの下に夏みかんを置いた」のは、「せっかくのえものがいなくなっていたら、この子は、どんなにかがっかりするだろう。」という気持からだということがわかる。

また、人物の心理は常に一定ではない。刻々の場面の進展とともに変化する。例えば、「白いぼうし」の第4の場面における松井さんの気持は、

○ 男の子とお母さんの気持を想像しているとき

↓

○ 女の子が消えてしまったとき

↓

○ ちょうたちのシャボン玉のはじけるような、小さな小さな声が聞こえたとき

では、それぞれに変化していることがわかる。

分析の手順

(1) 人物の置かれた状況を整理し、その状況に

置かれた人物の身になってその人物の心理をとらえる。

(2) 地の文や会話文の中に、人物の心理を述べている部分を見つける。

(3) 発言や行動から、その人物の心理を抽象化し、追求する。

(4) 人物の心理は刻々変化するものと考え、心理の起伏を追求する。

4 構成をとらえるには、どうすればよいか。

「物語・小説文」の学習では、ただ漫然と筋を追うだけに止まってはならない。一つ一つの事件の意味、事件と事件とのつながり合い、重なり合い、すなわち、「構成」を考えながら読むことが大切である。「構成」を調べる場合は、時間の経過、場所の変化、人物の出入りなど、いわゆる「5W1H」に留意して読むのがよい。

「白いぼうし」の場合は、幸い作者が、四つの場面に区切ってくれているので、その構成をとらえることが容易である。しかも、その四つの場面は、時間の経過、場所の変化、人物の出入りなどによって設定されているので、それを児童にとらえさせれば、「物語・小説文」の構成について、児童に理解させるのに便利であろう。

「白いぼうし」の構成とおおよそのあらすじは次のとおりである。

第1の場面(松井さんと夏みかん)

松井さんは、ほりばたで紳士のお客を乗せる。車の中には、夏みかんの香りが漂う。

第2の場面(松井さんの善意による行為)

松井さんは、道端に落ちている帽子を、車にひかせまいとしてひろいあげ、その中のちょうを逃がしてしまう。そして、その代りに夏みかんをぼうしの下に置いておく。

第3の場面(小さなかわいい少女の登場)

松井さんが車にもどると、後ろの座席に小さなかわいい女の子が座っていて、菜の花横町へ連れていってと言う。そこへ男の子が、お母さんとやって来ると、女の子は「早くやってちょうだい。」と言う。

第4の場面(松井さんの空想とちょうたちの会話)

松井さんが、男の子の驚く様子を想像しているうちに、女の子が後ろの座席から消えている。

車を止めて外を見ると、ちょうの会話が聞こえてくる。

したがって、各場面の役割は、第1の場面が、主人公の松井さんの性格とライトモチーフの夏みかんの提示、第2の場面では、その松井さんの善意が引き起す行為、第3の場面が、ちょうの化身の小さなかわいい少女の登場、第4の場面が、松井さんの空